

## 昭和三十年代「劇団CBC」のラジオドラマ資料

The scripts and pictures of plays what were given by the CBC theatrical company

嵯山女学園大学文化情報学部教授

飯塚 恵理人  
Erilo Iizuka

### 一 はじめに

在名古屋の民間ラジオ・テレビ局である中部日本放送(以下「CBC」)は、昭和26年の局発足当時から平成9年のメンバー全員の定年退職による結果的消滅まで「劇団CBC」という放送劇団を有していた。この劇団員のメンバーについては拙稿「中部日本放送放送劇団の資料について」(注1)に記した。なおその後、提供のあった劇団CBC関連資料についても拙稿(注2-4)に順次紹介してきた。本稿もその研究の成果の一連である。

昭和50年代までは写真・音源・放送台本などの放送資料を保管・保存しようという発想がなかったため、これらは放送が終わると処分された。放送演劇の現場は関係者以外のファンなどが出入りすることは原則としてないため、現存している昭和50年代以前の放送資料は非常に稀少である。今回はそのような放送資料の中から、昭和35年8月8日放送CBCラジオ劇「或る青年の死」(堀江史朗作・松谷敦演出)の放送台本を演出担当の松谷敦氏より、さらにこの放送の録音・本読み(台本の読み合わせ)時の写真(写真1)を出演者の松ヶ崎敬子(三期生 旧姓井藤)氏より提供いただいたのでここで紹介する。本読みの場の写真などは、内輪のものだけに残っているケースが少なく、読んでいた台本とセットにな

った形も珍しい。なお、この放送は松坂屋提供の「カトレヤ劇場」として放送されたが、その内容は学生運動などの当時の世相が色濃く投影されているドラマであり、これ自体「演劇文化」「世相資料」として貴重である。今回は資料紹介のみとして、演劇内容等の吟味は別稿を期す。また劇団CBCとして最後の舞台公演となった昭和35年3月20日と3月21日の「男にしてください」の上演パンフレットと舞台写真2枚も松ヶ崎氏より提供していただいたので併せて紹介する。

### 二 「或る青年の死」の放送台本に載る出演者「或る青年の死」のあらすじを以下にまとめた。

- 1 高木一郎が事故を起こす。
- 2 化粧品会社社長の息子である高木一郎の死を知らせるニュース。交通事故だが自殺の可能性もあることも語る。
- 3 家族が、誰が新聞記者に話したかについて語る。一郎の妹京子と父・母の問答から、自殺原因は東京から訪ねてきた学友の上田洋子かもという話になる。
- 4 一郎の葬儀の場面。上田洋子が訪ねてくる。弟の次郎は洋子に、洋子が帰った後、一郎が非常にがっかりしていたと告げる。洋子は東京での一郎と郷里で見る一郎に

ギャップがあることを言う。東京では熱心に学生運動をしていた一郎が、故郷に帰ると青年たちとダンスパーティなどをするほどに墮落してしまった。郷里の環境が一郎に学生運動や安保反対を許さなかったのではと言う。

5 次郎が洋子に、一郎が帰郷後、友人達へ安保反対運動を録音したテープを聞かせていたことを教える。さらに次郎は、一郎は気が弱かったと告げる。

6 洋子は、会いに来た時、一郎が実はブルジョワ育ちで、父親が進める縁談の相手である田沢代議士の娘春子と会う予定があること、洋子のことを母親に知られないようにしようとするのを知り、「住む世界が違う」と思って東京に帰ったのだと次郎に話す。

7 洋子と次郎が話している場に京子と田沢春子が現れる。春子は父の田沢代議士が縁談を進めていたことを話し、この政略結婚を急いだことが一郎の自殺の原因になったのではと言う。

8 葬式に来ていた田沢代議士を一郎の両親が送り、春子は後で次郎が送ることとなる。

9 一郎の地元の友人たちが現れ、一郎の遺志を継いで政治活動の啓蒙運動をしようと言う。そして一郎の学生運動の演説テープを借りて去る。

10 一郎の両親が帰宅し、まだ残っていた洋子を母が責め、帰るように告げる。

11 誰もいなくなった一郎の仏前の前に父と母が座り、泣く。別室では京子が「一郎は本当に自殺だったのか。」と疑問を呈する。

12 一郎の声で、「原因は自分でもわからない。強いて言えばみんなが、何もかもが、主体性のない僕を僕自身の意思ではないところに引っ張っていかうとした結果なのだ」と告げる。

「或る青年の死」の放送台本の巻頭に載せられている配役と出演者を以下に列記した。( )はその登場人物の役の設定年齢である。

(出演)高木一郎(24)大塚竜司、次郎(22)長塚治、京子(19)伊藤満貴子、父(56)柳有、母(50)藤岡ひろ子、女中(27)加藤教子、上田洋子(24)井藤敬子、友人A(24)長谷川平八郎、友人B(24)久田信二、友人C(女)(23)島愛子、田沢氏(60)朝倉孝、田沢春子(21)伊藤友乃、声A中江研一、声B鎌田吉三郎

これらの出演者について拙稿(注1)を参考に、「劇団 CBC」の何期生であるかを以下に記した。大塚竜司：四期生(拙稿では「大塚龍次」)、長塚治：拙稿に名前がないが、松ヶ崎氏に五期生と教示いただいた、伊藤満貴子：四期生(拙稿では「伊藤満喜子」)、柳有：一期生、藤岡ひろ子：一期生(拙稿では「藤岡広子」)、加藤教子：劇団員だが何期生か不明、井藤敬子：三期生、長谷川平八郎：四期生、久田信二：拙稿の五期生の「久田」、島愛子：拙稿の四期生の「此島愛子」、朝倉孝：三期から四期の間に入団、伊藤友乃：四期生、中江研一：四期生の「中江真司」、鎌田吉三郎：四期生。彼は劇団 CBC の消滅時まで在団した。なお、一期生は昭和 25 年後半～26 年、二期生は昭和 27 年、三期生は昭和 28 年、四期生は昭和 33 年、五期生は昭和 35 年の入団である。

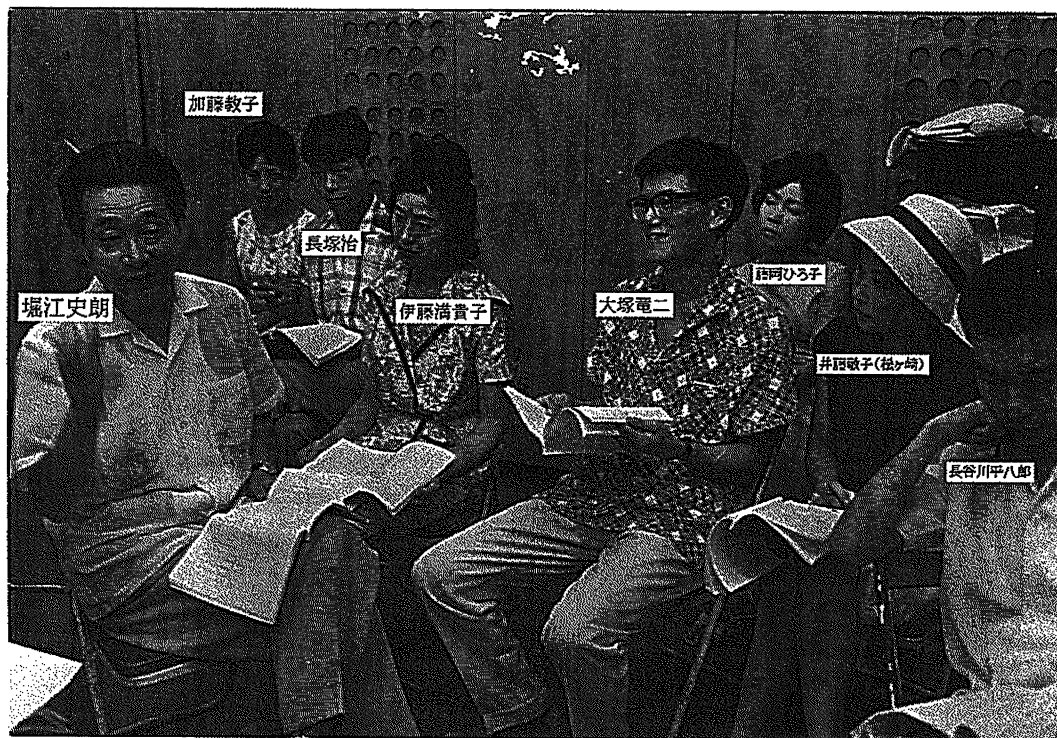


写真1 「或る青年の死」の本読み

### 三 松谷敦氏の資料談話

台本を提供いただく際に、松谷敦氏より資料についての談話もファックスでいただいた。以下にそれを転載した。

・堀江史朗さんのこと（著者注：「或る青年の死」の作者）

戦後 NHK (BK) 大阪放送局でラジオドラマの脚本・演出を手掛け、その道の先駆者として知られている。民放開局後、その門下生たちが多くの局で活躍する。S27 か 28 頃 NHK を退職し、放送作家、演出家、そして放送評論家として活躍する。脚本も NHK はじめ民放各社に書いている。その他、文部省の芸術祭のドラマ部門の審査員などもつとめられ、後に博報堂の副社長に就任されました。

私たちとの関わりは、堀江氏の BK 時代の後輩であった岡島泰さんが S35 頃から私の上司であった関係で、その紹介もあり、若手ディレクターと劇団員の指導をかねて脚本と演技指導をお願いしたものである。堀江さんには S32 「祝電」と二作目である。同様に内村直也氏に S36 「奇数の青春—テレビまで」、並河亮氏に S36 「古墳」などがある。昭和 37 年はテレビに力を入れた社の方針もあり、こんな勉強するみたいな余裕もなくなり、ラジオドラマの凋落期に入った……。ラジオも個人向け、ディスクジョッキースタイルが多くなった。

・松谷氏の記憶に残る「或る青年の死」放送前後の世相

S34 (国内) 「安保改正阻止でデモ隊国会内に乱入」 岩戸景気もあって技術革新す

み、電気洗濯機、冷蔵庫、テレビと電化製品が生活の中に定着しはじめる。その結果石炭産業頭打ち、失業問題引き起こす。三池の合理化、反対闘争ひき起こす・伊勢湾台風（海外）キューバ革命・チベット反乱・ソ連月ロケット月面到着

松谷氏の談話にあるように、劇団外部の方である堀江史朗氏に脚本を依頼したのは、脚本そのものが必要という面以外に「若手ディレクターと劇団員の指導を兼ねて脚本と演技指導を依頼する」という側面があった。「或る青年の死」については元劇団員の長谷川敬氏より談話をいただいている。松谷氏談話の大部分と長谷川氏談話は、共に昭和30年代の放送演劇についてまとめる別稿に譲ることとする。

#### 四 新聞に載った番組宣伝

「或る青年の死」は朝日新聞と名古屋タイムズで番組宣伝を行った。その新聞記事を以下に挙げた。無署名記事なので執筆者の名前は不明であるが、両者は似ているのでCBCの方で番組の情報をまとめて各新聞社に送り、それをもとに各新聞社が掲載したことが考えられる。

##### ①朝日新聞〔昭和35年8月8日12版(6面)〕

ききもの みもの カトレヤ劇場「或る青年の死」CBC ラジオ 後8:30 あるブルジョア家庭の息子の死因をめぐって、そこに底流として流れる若い世代、古い世代の確執を描いたもの。堀江史朗の作で出演は大塚竜司、長塚治、柳有、藤岡ひろ子ほか劇団CBC。ブルジョア家庭の一青年が自動車事故で死んだ。この青年は六・一五事件にも

参加し、帰郷運動にも積極的に加わっていた。しかしその家庭に帰ったとき、青年はその家庭環境と考え方の矛盾に悩み苦しんでいた。翌日、青年は自家用車で運転中誤って死ぬ。だが計画的な自殺とも見られるのだ。この青年はなぜ死んだのだろうか……。

##### ②名古屋タイムズ〔昭和35年8月8日(4面)〕

ラジオカトレヤ劇場『或る青年の死』▽CBC = 後8:30 あるブルジョア家庭の息子の死因をめぐって、そこに底流として流れる若い世代、古い世代の意識の確執を提出し描いたもの。【あらすじ】ブルジョア家庭の一青年が自動車事故で死んだ。この青年は六・一五事件にも参加し、帰郷運動にも積極的に参加していたが、その家庭に帰ったとき、青年は、その家庭環境と考え方との矛盾に悩み苦しんでいた。或る日、自家用オープンカーで運転中、ガケから落ちて死んだ。運転を誤ったように見えるが、計画的自殺ともみられている。この青年は何故死んだのだろうか……。堀江史朗作。折本吉教作曲。【出演者】大塚竜司、長塚治、柳有、藤岡ひろ子ほか。

#### 五 舞台公演「男にしてください」の舞台写真と上演パンフから伺われる劇団CBCの舞台公演目的とその内容

劇団CBCはラジオ放送の「声優団体」として出発したが、やがてテレビ時代が来ると、それに対応するための勉強として舞台公演を行った。これについてはすでに拙稿(注3, 4)で触れているが、平成26年度は新たに、劇団CBCとして最後の舞台公演となった昭和35年3月20、21日の第7回公演「男にしてください」の上演パンフレットと舞台写真2枚(写



写真2 「男にしてください」の舞台写真

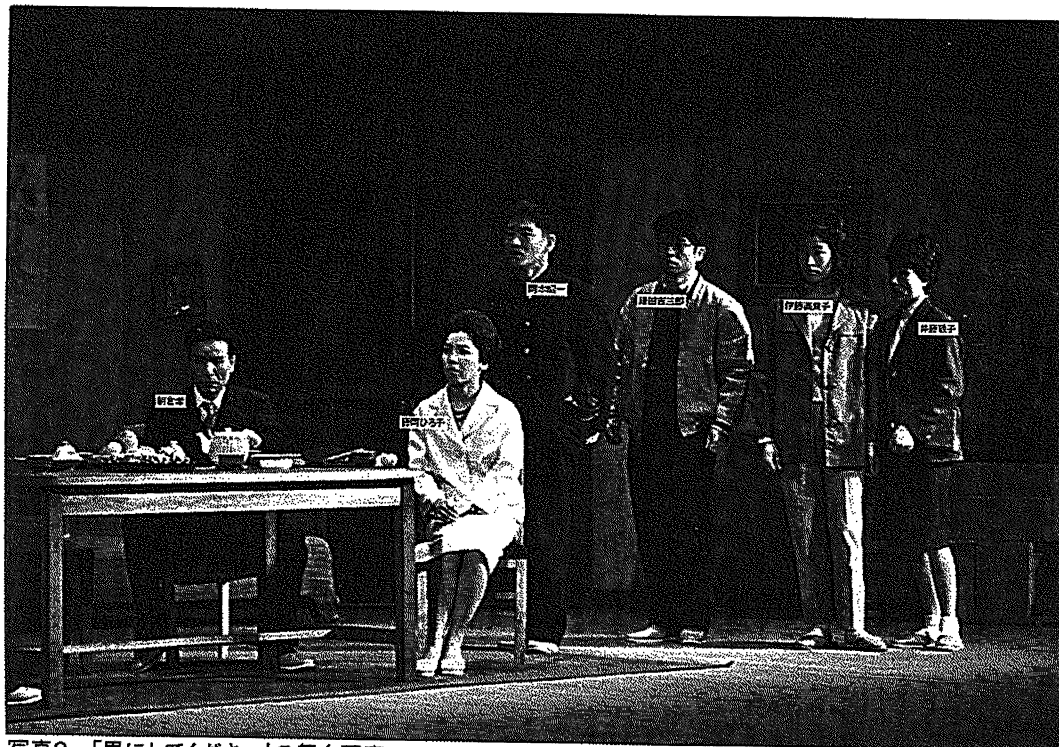


写真3 「男にしてください」の舞台写真

真2、3)を松ヶ崎敬子氏より提供いただいた。

上演パンフレットによるスタッフと配役は以下の通りである。企画：岡山泰、製作：松枝孝二、演出：小幡欣治(筆者注：原作も)、演出助手：本島勲、美術：島崎陸、照明：柘植貞輝、効果：松ヶ崎黄長、岩田務、小道具：山中義一、衣装：鈴木鯉子、化粧：永井美和子、舞台監督：しかたしん、舞台監督助手：森孝子、島愛子、進行：伊予田吉広、キャスト 大越伝吉：柳有 大越房子：中村嘉奈子 大越萌子：伊藤友乃 飯沼しづ子：松原実智子。

このうち劇団 CBC 団員は拙稿(注1)によると、森孝子(三期生)、島愛子(四期生の此島愛子)、柳有(一期生)、中村嘉奈子(一期生)、伊藤友乃(四期生)、松原実智子(三期生)の6名である。キャストの全員と舞台監督助手の2名が劇団員であり、この舞台公演が劇団員のテレビドラマ対応のための「勉強の場」であったことが裏付けられる。

「男にしてください」の上演パンフレットからあらすじである「ものがたり」を掲載すると下記ようになる。「ものがたり 家内工業的な玩具工場だとか、駄菓子問屋などが群居する東京の下町、台東区で、これも小さなメリヤス会社を営んでいる大越伝吉は、周囲からの勧めもあって、区議会議員選挙に立候補することを決意する。……。このドラマは、選挙戦公示を目前にひかえた早春のある日の午前、選挙事務長の炭屋の主人を中心として町内の自称選挙参謀連が集って、その票読みに余念のない大越家の応接間から始まる。紺野のソロバンには総計千七百票、絶対当選間違いなしと出た。しかし、懸案の中立党公認証の下附が突然中止されたことを知らされ、一同に少なからず動揺の気持ちが流れる。その時

突如大越は叫んだ“みなさん、金は出します。どうかわしを助けて下(著者注：以下欠損判読不可につき中略)”かくて、てんやわんやの選挙戦は開始された……。終幕近く……。少し頭の足りない大越家の女中君子と同じく使用人新一との会話——。君子 新一さん、だんなさんはパスしたのかい？ 新一 パス？ああ、パスしたって事だろう。ウン、当選しやがったよ。君子 じゃ、男になったんだね。ヒヒ 新一 旦那はずっと前から男だよ……。果して、大越伝吉は男になったか……」

## 六 まとめ

劇団 CBC に関する資料のうち、飯塚研究室に提供いただいたラジオ放送台本「或る青年の死」と舞台公演「男にしてください」の舞台写真及びパンフレットから、あらすじ・配役等を紹介した。この二作はラジオ放送と舞台公演でありジャンルが異なるが、共にテレビドラマに対応するための劇団員の訓練を目的とするという共通項があった。さらにどちらも同時代の社会と庶民を主人公とする、歌舞伎でいう「世話物」に属する作劇法を取っていた。この作劇法はやがてテレビドラマの主流となっていく。

昭和30年代の演劇文化、放送文化、愛知県の演劇文化史を考える場合、放送劇団の活動は時代をリードしたものとして特筆すべきであり、さらに資料を収集・整理してアーカイブ化し、演劇研究としての研究基盤の整備が急がれる分野である。

## 注

1 飯塚恵理人「中部日本放送放送劇団の資

料について」、『椋山女学園大学研究論集』  
第43号人文科学篇、椋山女学園大学、  
2012年3月発行、p61-68

2 飯塚恵理人「昭和二十年台・三十年台の  
CBC ラジオ劇関係資料について」、『椋山  
女学園大学文化情報学部紀要』第12巻、  
椋山女学園大学文化情報学部、2013年3  
月発行、p169-178

3 飯塚恵理人「劇団 CBC 関連資料—長谷  
川敬(芸名：芹江敬)氏所蔵写真から—」、  
『椋山女学園大学文化情報学部紀要』第  
13巻、椋山女学園大学文化情報学部、  
2014年3月発行、p181-189

4 飯塚恵理人「民放草創期放送音源及び放  
送劇団関係資料の収集・整理とアーカイ  
ブ化報告」、『椋山人間学研究』第9号、椋  
山人間学研究センター、2014年3月発行、  
p183-193

#### 補記

本稿は椋山人間学研究センター「日本・アジ  
ア文化と人間」プロジェクトの飯塚担当分成果  
報告書になります。プロジェクト研究費を  
いただきました人間学研究センターに対して  
感謝申し上げます。また飯塚が代表を務める  
「メディアと古典芸能研究会」がいただいた、  
平成25年度放送文化基金助成による成果の  
一部となります。記して感謝申し上げます。

貴重な放送台本の提供及びご教示をいた  
だきました松谷敦氏、写真を提供してくださ  
った松ヶ崎敬子氏と、その便宜を図ってくだ  
さった東海民放クラブ「音風景の会」会員の皆様  
に心より感謝いたします。

#### 後記

本稿を脱稿後、松ヶ崎敬子氏より「加藤教子  
(のりこ)」が四期生であること、「此島愛子」は  
やはり「島 愛子」が正しいことを指摘され、  
氏がお持ちの名簿を提供していただいた。そ  
れを以下に示した。

##### ○ 一期生

今泉 洋、大村一平、栗谷俊男(栗谷・谷  
地森両氏は一期以前から。後アナウンサ  
ーに)、谷地森三平(昇とも)、柳 有、石黒  
節子、井川則子、田中幸子、津島和子、中村  
嘉奈子、藤岡広子、山尾澄子

##### ○ 二期生

浦野 光、万代泰輔

##### ○ 三期生

芹江 敬、中山民生、舟木淳、宮田桂、井藤  
敬子、大賀祥子、文(かざり)悦子、高橋か  
つ子、永井陽子、松原実智子、松川佳澄、  
森 孝子(玉置孝子の可能性あり)

##### ○ 二期と三期の間

新橋 博、朝倉 孝

##### ○ 四期生

岡本昭一、大塚竜司、鎌田吉三郎、柴田伸  
之、中江真司(中江研一の可能性あり)、長  
谷川平八郎、伊藤友乃、伊藤満貴子、稲生  
とみ子、加藤教子、島 愛子、高田典子、三  
田村秀子、湯浅純子

##### ○ 五期生

折原 正、加藤昌弘、今 一(こん・はじ  
め)、滝 雅也、長塚 治、久田真治(著者  
注：本稿では「久田信二」、藤田(名不明)、  
増岡 弘、加藤圭子、長谷川一枝、原田千  
代恵、坂 玲子、村上まり